WASEDA bungaku FreePaper
vol.031_2015_winter

わからん?! 文学

Wonderful BUNGAKU

玉川重機
沼野充義（再録）
岡真理（再録）
大江健三郎（抜粋）
斎藤美奈子
片山亜紀
迫川尚子
八代嘉美
円城塔
大澤真幸
谷川俊太郎＋谷原章介

since 1891

早稲田文学
2015年
秋号＆冬号
刊行！

ブックガイドで いざ、世界文学ケモノ道

［新連載］
谷原章介の「あの作家に会いたい」
ゲスト 谷川俊太郎

¥0

表紙グラビア：大江健三郎（「早稲田文学 2015 年秋号」より）

宇都宮アート&スポーツ専門学校は、WBの刊行を応援しています。

■文芸創作科
ライトノベル作家養成コース
小説家・シナリオライター養成コース
ネット作家コース
文芸ジャーナリスト養成コース

■マンガ・アニメ科
マンガ家・コミック養成コース
アニメーター養成コース

■芸術・デザイン科
イラストレーター養成コース
グラフィックデザイナー養成コース

■声優・アナウンス科
声優タレント養成コース
俳優・タレント養成コース
アクション・俳優養成コース
アナウンサー・DJ 養成コース
映画監督コース

■スポーツビジネス科
スポーツトレーナー養成コース
スポーツインストラクター養成コース
スポーツビジネスコース
キッズスポーツコース
ダンスインストラクター養成コース
ストリートダンスコース

■ファッションビジネス科
ファッションデザイナーコース
アパレル販売・バイヤーコース
ファッションスタイリストコース
コスチュームデザインコース

宇都宮アート&スポーツ専門学校

〒320-8533 栃木県宇都宮市大寛 1ー1ー1　028-635-3211　http://ubdc.ne.jp

ブックガイドで▼いざ、世界文学ケモノ道

ブックガイドでたどる新しい世界文学。まずは好評連載、無類の本好き中学生・草子がお届けします。今回は、ドミニカ共和国出身の英語作家ジュノ・ディアスによる長篇小説をご紹介。

単行本『草子ブックガイド』(講談社)3巻まで好評発売中!
12/12(土)〜/27(日)池袋千年画廊にて、
動物をテーマにしたイラスト展「玉川動物園」が開催。

ブックガイドで

いざ、世界文学ケモノ道

小説を通じて世界を訪ねる

地図に書かれたこの場所ではどんなことが起きているんだろう――小説がそれを教えてくれます。
本を開けば「ここ」と「そこ」が繋がり、やがて新たな道へつづいていきます。
さまざまな言語で書かれた小説を渡り歩くための地図をお届けします。

旅・亡命・逃避行…「移動」をめぐる
世界文学ブックリスト

★アメリカ合衆国・中国
柴田元幸→「ニューヨークから来た女」
　ハ・ジン

★アメリカ合衆国
西崎憲→『エリス島』マーク・ヘルプリン

★コロンビア
野谷文昭→『パライソ・トラベル』
　ホルヘ・フランコ

★アイルランド
栩木伸明→「ふたりの秘密」
　ウィリアム・トレヴァー

★ノルウェー
岡本健志→『わが闘争』
　カール・オーヴェ・クナウスゴール ほか

★イタリア
和田忠彦→『いつも手遅れ』
　アントニオ・タブッキ ほか

★チェコ
阿部賢一→『黄金時代』ミハル・アイヴァス

★ポーランド・アメリカ合衆国
西成彦→『不浄の血』
　アイザック・バシェヴィス・シンガー

★ポーランド
小椋彩→『逃亡派』オルガ・トカルチュク

＊旧ソ連・アメリカ合衆国
沼野充義→『かばん』セルゲイ・ドヴラートフ

★ナイジェリア・アメリカ合衆国・イギリス
くぼたのぞみ→『アメリカーナ』
　チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ

★イスラエル
秋元孝文→「嘘の国」エトガル・ケレット

＊パレスチナ
岡真理→「太陽の男たち」
　ガッサーン・カナファーニー

★インド
石田英明→「息の群れ」
　アーラムシャー・カーン

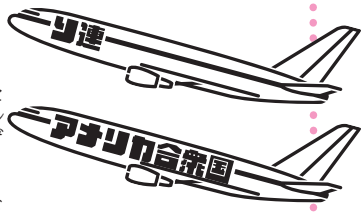
★タイ
福冨渉→『追放』プー・クラダート

★中国
藤井省三→『1988』韓寒

★韓国
きむ ふな→『リナ』姜英淑

★朝鮮・日本・台湾・香港・中東等
宋恵媛→『自由の地いずこ』北影一

★日本
岡和田晃→『怪道をゆく』向井豊昭
土屋誠一→『生きようと生きるほうへ』
　白井明大
木村朗子→『避難所』垣谷美雨



「かばん」という携帯用祖国

沼野充義
Mitsuyoshi Numano

セルゲイ・ドヴラートフ
『かばん』
ペトロフ＝守屋愛訳
成文社

セルゲイ・ドヴラートフはソ連国内では作家としてほとんど認められないまま、一九七八年に出国を余儀なくされ、ニューヨークに住みついた。そこでソ連からの移民（大部分はユダヤ系だが、彼らの母語はロシア語である）のための新聞の編集に携わりながら、ロシア語による執筆活動を続け、短編が二、三度だが、英訳で『ニューヨーカー』に掲載されることもあった。本書の訳者ペトロフ＝守屋愛さんの言葉を借りれば、彼の代表作の一つ、『かばん』は「典型的な亡命文学」だ。レニングラードからニューヨークに移動した著者自身の経験に裏打ちされた作品だからだ。しかし、これは「亡命の地」で、「祖国での過去を綴」った「記憶の文学」でもある。作者自身と等身大の語り手が、アメリカ移住の際にソ連からの持ち出しを許された、たった一つのスーツケースに詰め込んだ思い出の品々にまつわる記憶を次々に語っていく――「フィンランド製の靴下」「特権階級の靴」「フェルナン・レジェのジャンパー」「冬の帽子」「運転用の手袋」。こう列挙しただけでは、なんのことやらわからない、いずれも新天地アメリカでの生活には役にたたないものばかりだが、ソ連での生活の一コマ一コマを鮮やかに甦らせる。自分を迫害し、自分も見切りをつけてきたはずの祖国のエッセンスが、じつは「かばん」一つに詰め込まれ、携帯用祖国となって、主人公にまとわりつく。その意味ではこれは、移動の文学であると同時に、逆説的に、人はいかに移動できないか（祖国を捨てられないか）を示す文学でもあると言えるだろう。深刻になりすぎない飄々たるユーモア、彫琢された簡潔な言葉、いかなるイデオロギーも排除するミニマリズム――ドヴラートフの天才は生前は十分評価されず、彼はペレストロイカ後のソ連で爆発的な人気を呼んだのも束の間、一九九〇年に移住先のニューヨークで亡くなった。いまでは彼の住んだ一角に、ドヴラートフ通りというのもあるらしい。

（ロシア東欧文学）

〔早稲田文学二〇一五年冬号より再録〕

アメリカ合衆国

移民大国アメリカの小説を見てみましょう。かつて移民局があったエリス島にまつわる作品を選んだのは西崎憲。一方、数ある移民小説から、柴田元幸は中国出身のハ・ジンを紹介。中国人にもアメリカ人にもならない「どっちつかずの居心地の悪さが妙に印象に残る」そう。

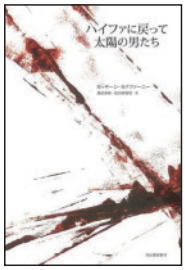
国の出入り口として、世界中から人が集まる国際空港。ロイ・キージーの短篇「待ち時間」が描くのは、空港に閉じ込められてしまった乗客たち。やがて暇をもてあまし、なんとオリンピックを開催することに!? 藤井光が現代アメリカ文学を「空港と飛行機」から読み解いたエッセイも併せて。

さらに都甲幸治とマイケル・エメリックによる翻訳者対談では、アメリカ文学と日本文学のあいだで生まれた小説を語ります。（以上の作品・エッセイ・対談はすべて早稲田文学二〇一五年冬号に掲載）

パレスチナ

21世紀の越境、あるいは「私たちの死」

岡真理 Mari Oka



ガッサーン・カナファーニー
「太陽の男たち」
黒田寿郎訳
河出書房新社

「欧州の難民問題」がさかんに報じられている。シリアなどから日々、怒濤のように欧州に押し寄せる何十万もの難民たち、その流入に見舞われる欧州の国々。だが、地中海の彼岸を目指して――それはまた、破壊と殺戮という非常事態が日常と化した世界の「彼岸」でもある――その途上、密閉されたコンテナに詰め込まれて窒息死したり、あるいは老朽化した小さなボートにすし詰めにされた挙句に船は転覆、溺死して、「欧州の難民」にも「欧州の難民問題」にもなれなかった無数の者たちがいる。さらにその陰には、密航業者に払うお金もなく、「難民」になることもできないまま、破壊と殺戮の世界――此岸――に釘付けにされ、その死すら報じられない者たちがいる。

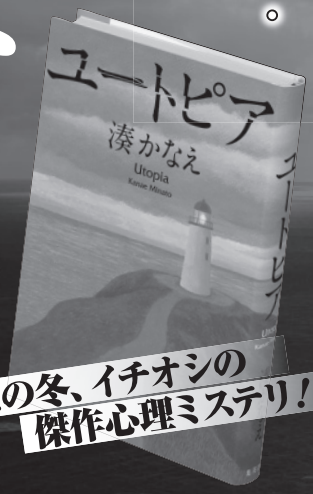
これが、21世紀の10年代におけるこの惑星の、少なからぬ数の者たちにとっての典型的な「越境」の――あるいは越境の不可能性の――形だ。この、此岸と彼岸のあわい、国境と国境の狭間で、彼岸にたどり着くことなく生を途絶させる越境者の運命を半世紀も前に、小説として鮮烈に形象化した作品がある。パレスチナ人難民作家ガッサーン・カナファーニーの『太陽の男たち』（一九六二年）だ。

三者三様の理由で、イラクのバスラからクウェイトへ密入国を図る三人のパレスチナ難民の男たち。彼らの密入国を請け負った給水トラックの運転手の発案で、三人は空っぽの給水タンクに身を潜め、国境の検問所を通過しようとする。だが、暇を持て余す国境管理官の無駄話に運転手がつき合わされて、入国手続きは予想外に手間取り、砂漠に放置され焦熱地獄と化したタンクの中で、男たちは声を上げることもできずに死んでいく。パレスチナ人が難民となって十数年、作品は、当時彼らが置かれていた閉塞状況を、虚構の物語を通して、類稀な強度で象徴

善意は、悪意より恐ろしい。

足の不自由な少女の存在をきっかけに、
車いす利用者を支援するボランティア団体を
設立した三人の女性たち。
だが、「あの子は実は歩けるのでは」
という噂がたちはじめ…。
美しい海辺の町に、不協和音がひろがる。

ユートピア



この冬、イチオシの
傑作心理ミステリ！

湊かなえ

最新刊 発売中●本体1,400円

〈集英社文庫・好評既刊〉
白ゆき姫殺人事件 ●本体600円 [電子書籍版も配信中]

●表示価格は本体価格です。別途、消費税が加算されます。
〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 集英社

的に描き出す。

『「民族」を読む』でこの小説を論じた作家の徐京植は、命を賭して砂漠を渡り密入国を果たそうとする男たちに、一九五〇年代、船倉に身を潜めて海を渡り、日本への密入国を図った叔父らの世代の朝鮮人の姿を重ね、「これは私たちの死だ」と書いた。だとすれば、それから半世紀を経て今、この小説が描く三人のパレスチナ人の男たちの死は、我々にとっての「彼岸」を生きる、この惑星の無数の人間たちにとっての「私たちの死」にほかならない。

（現代アラブ文学）

〔早稲田文学二〇一五年冬号より再録〕

半世紀後の『ヒロシマ・ノート』

大江健三郎 Kenzaburō Oe

――大江さんが『ヒロシマ・ノート』で語られる、あるいはそれ以降に、核と人間の関係について語られるとき、「日本人」あるいは「日本人としての、日本の作家としての大江健三郎」と、「国」という枠組みは手放さずに語られることが多いように思います。（…）「日本語で書かれた文学」と「日本人の文学」あるいは「日本という国の文学」というものは、必ずしも一致しませんよね？

大江◉ぼくは、いま自分が書いている文学は、根本的に「日本語の文学」だと考えています。だから「日本人の文学」か、「日本人」という意識を押し出して自分が「日本人の文学」を作っているかと言えば、そうではないのです。ひとりの個人である人間として、書いている。日本で生きている一個人として小説を書いているのであって、「日本人の文学」を作っているということとは違う。だからぼくは「日本語の文学」ということを強調するんです。時どきぼくの小説を読んで「非国民」の、と呼んで批判するひとがいます。「お前は日本国人、日本の国民としての文学を作っているのではない」と批判されるなら、それはその通りなんです。ぼくは「日本語」という言語を大切にして、「日本語の文学」を書いているんですから。

しかし、そのような個人であるぼくは、同時にいま、日本の社会に生きています。「個人として生きている」と言っても、自分以外の人間との関係を、すっかり断ち切って生きているわけではない。「いま、ぼくが生きている」というのは、二十世紀から二十一世紀に至るこの八十年という時代の人間として、そしてこの日本の社会の人間として、生きてきたわけです。そこで「日本語」を使って書いている。

純粋に、社会と自分を切り離して小説を書く人もいます。しかしぼくは「この社会で生きている」ということを重く考えます。たとえば、国家の政策が問題になる場合は、やはり「日本人として、いまこの政府に賛成できない」と言うことになる。それはやはり、ひとりの日本人として、いまの時代に日本語で生きている人間として、どうしても大切なことだと考えるからです。ぼくの小説にそれとしての社会性を帯びた人間が出てきたり、社会的な問題がでてくることがぼくにとって当然であるならば、それがいまの日本という国、日本という社会に生きてそれらの問題を考えざるを得ないということなんですよ。

もちろんぼくは個人としていま生きて、そして個人として書いています。そのうえで、いちばん大きい自分の個性として、日本語の文学を書いている。二十世紀終わりから二十一世紀はじめの日本社会に、すっかり首まで浸かって生きてきた、生きている人間として、日本語で書いている小説――それが、ぼくの小説です。

（聞き手＝市川真人）

〔早稲田文学二〇一五年秋号より抜粋〕

戦後70年、世界のなかの「日本」を考える 大江健三郎ロングインタヴュー収録

早稲田文学　2015年秋号
編集委員企画特集①　責任編集 市川真人

広島について、いろんなひとに聞いてみた
大江健三郎インタヴュー
「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」
堀川惠子＋重松清　栗原健太　小山田浩子
長谷部恭男　港千尋　笹岡啓子　東直子
［緊急企画］
安全保障関連法案とその採決についてのアンケート
佐々木敦 浅田彰 宮内悠介 勝谷誠彦 中村文則
中島京子 絓秀実 阿部和重 小澤英実…全87名

定価（本体1500円＋税）
ISBN: 978-4-480-99305-2
発行：早稲田文学会
発売：筑摩書房

新世代の世界文学を考える 総勢21人によるブックガイド収録

早稲田文学　2015年冬号
編集委員企画特集②　責任編集 藤井光

ぼくたちはなぜ動かずにいられないのか？
世界文学ケモノ道
新世代の短篇7作
「移動」をめぐるブックガイド
「国」をこえた小説を探る3つの対話
呉明益＋鴻巣友季子＋温又柔
都甲幸治＋マイケル・エメリック
朝井リョウ＋チョン・セラン
第5回早稲田大学坪内逍遙大賞発表
［大賞］伊藤比呂美　［奨励賞］福永信

定価（本体1400円＋税）
ISBN: 978-4-480-99306-9
発行：早稲田文学会
発売：筑摩書房

旧作異聞 32

ご当地文学篇

『青葉繁れる』
（文春文庫）

斎藤美奈子
Saito Minako
56年生。古典とベストセラー、時事問題からマンガ・アニメまで、題材の硬軟を問わず舌鋒鋭く論じる著作には、物の見方をひっくり返す「目からウロコ」が満載。最新刊『ニッポン沈没』好評発売中。

ご当地文学は、地元の人には誇らしいものであるにちがいない。その伝でいくと、井上ひさし『青葉繁れる』（一九七三年）も仙台市民にとっては「誇らしい作品」であるはずなのだが……。

『青葉繁れる』は一九五〇年代の宮城県仙台市を舞台にした青春小説だ。視点人物の田島稔は「東北一の秀才校」たる県立男子高（通称「一高」）の三年生。ただし稔のほか、デコ、ユッヘ、ジャナリの四人は、成績下位者が集うクラスのメンバーだ。ここに東京から転入してきた俊介を加えた五人が巻き起こす騒動を、物語は描いている。

明記されてはいないけれど、「一高」が作者の母校・仙台第一高校であるのはほぼ明らかだろう。近隣の県立女子高校は、当時の仙台第二女子高校（通称「二女高」。現在の仙台二華中学高校）と見てまちがいあるまい（宮城県は男女別学の時代が長く、一高も二女高も共学になったのは二〇一〇年だ）。作中で描かれる事件も、この二女高がからんでいる。

ひょんなことから、二女高の女生徒六人とデートの約束をした稔たち。待ち合わせは松島の五大堂。だが、六人のうち五人は待ち合わせの場所に現れず、来たのは〈瘤のように頬が顔にぶらさがっている〉ために彼らが「たん瘤」というあだ名をつけた女子ひとりだった。

「おら、正直いって女の子に飢えてる。だけっとも、たん瘤だけは嫌だ」とゴネるユッヘ。結局デコに「たん瘤」を押しつけ、ほかの四人は逃げてしまうのだが、〈デコのことだから、きっと双観山のどこかで、たん瘤に手を出すだろう〉と考えた四人は〈それならひとつその場面を覗き見してやろう〉とばかり二人の後をつけるのだ。はたせるかな、当のデコは四人が隠れている目の前で〈力いっぱいたん瘤の手を引いた。たん瘤がつんのめってくるのをやりすごし、背後から抱きすくめ、そのまま松林の中にもつれ込んだ〉。

ここから先の展開にはちょっと言葉を失う。

〈いいぞ、デコ〉〈あいつついにやるっぺ〉とはしゃぐ四人。〈デコがたん瘤を膝の下に組み敷こうとして必死になっていた。が、彼女も力が強く、デコの思うようにはなかなかさせぬ。デコはいきなり両手でたん瘤の胸の、ふたつの膨みを握った。彼女がはっとしたすきにデコは腰に下げていた手拭いを抜き取って、その口につめ込み呼び声を封じた。これでたん瘤は急にひるんだ。そこにつけ込んでデコは彼女の黒い色の下穿に手をかけた。（略）ついにデコが下穿を膝頭まで引きずりおろした〉

どうなんですか、この場面。「たん瘤」が下着の下に水着を着ていたため彼女は難を逃れるのだが、抵抗する女生徒の口に手拭いを詰め込んで、下着を引きずり下ろすのだ。これは立派なレイプ未遂事件、被害者が告発したら「強制わいせつ罪」で逮捕されても文句はいえない。

ところが、稔ら四人は止めもせず、〈途中でやめるな、もったいねぇでねぇか〉〈最後までやれっちゃ、このばがやろ〉とはやしたてるだけ。しかも事件後、責任を取れとねじ込んできた二女高の女性教師を軽蔑したように、一高の校長（生徒に理解があることになっている）はいい放つのだ。〈彼女はひょこひょこ山へ行き、行ったら当然起るであろうことが起っただけなのに、乱暴されたとわめく、これはじつに卑怯ですなあ〉

いやはや、とんだ高校があったものではないか。東北一の秀才校が聞いて呆れる。①生徒は他校の女生徒にレイプを試みる。②見ていた他の生徒は制止もせずにけしかける。③校長はそれを容認し、かつ自己責任論をタテに被害者の女生徒を卑怯者呼ばわりする。

クライマックスがコレなのだ。舞台が戦後まもない一九五〇年代の地方都市である点を差し引いても、他の逸話も含めて作品全体を覆う女性差別的な視点はいかんともしがたく、これが七〇年代に執筆され、今日もなお〈ユーモアと反骨精神に満ちた青春文学の傑作〉（文春文庫のカバー解説より）として評価されていること自体が謎だ。

こうなるとご当地文学とは、まことに罪作りなものではある。「杜の都」と並ぶ仙台の代名詞に近い「青葉」をタイトルに冠し、仙台一高をモデルにし、近郊の名所が登場する作品の内容がこれでは、むしろ不名誉の宣伝。とりわけ一高生の名誉はズタボロである。それとも松山市民にとっての『坊っちゃん』と同じで、仙台市民も『青葉繁れる』を読んでいないのだろうか。井上ひさしは中学三年から高校卒業までを仙台ですごし、仙台文学館の初代館長も務めたが、作家はともかく『青葉繁れる』がこの町で愛されている形跡は、特に見当たらないのである。読んじゃった人が驚き、「いまのは見なかったことにしよう」と考えたのでは、と私は勝手に推察している。

日直から。

今号の日直
片山亜紀

「おひとりさまのワンルーム」？
――V・ウルフ『自分ひとりの部屋』新訳に寄せて

Katayama Aki
1969年生。イギリス小説、ジェンダー研究専攻。『フェミニズムの名著50』『現在と性をめぐる9つの試論』（共著）、『癒しのカウンセリング――中絶からの心の回復』（訳書）、『古典BL小説集』（共訳）ほか。『自分ひとりの部屋』は平凡社ライブラリーから発売中。

『WB』読者のみなさま、はじめまして。わたしは今年8月、イギリスの女性作家ヴァージニア・ウルフの評論 *A Room of One's Own* の新訳を『自分ひとりの部屋』というタイトルで出しました。今回の小欄では、この訳書の話をさせていただこうと思います。

A Room of One's Own は、「女性と小説」についてウルフが1928年に行った二つの講演をもとに、1929年に出版された本です。したがって、評論といっても講演録。さらにその講演録の大半は、ウルフが講演の原稿を書くまでの「二日間のお話」仕立てになっています。

この「お話」の中で、ウルフ扮するところの架空の語り手は、「女性と小説」について何を語ったらいいかと思い悩みながら、あちこち彷徨います。最初は大学へ――でも女性である語り手は、伝統ある男子カレッジの芝生の上を散策することもできなければ、大学図書館の貴重書を閲覧することもできません。この体験から、語り手は「女性と小説」の「小説」のほうをいったん差し置き、「女性」は社会の中でどう扱われているのだろうか、扱われてきたのだろうかと考察を始めます。

次に向かうは公共図書館――ここでは女性だからと追い出されることはありませんが、『女性の精神的・道徳的・身体的劣等性』なる本が置いてあったりして、論述の見せかけを取った巧妙な女性攻撃に、語り手は憤然とします。

最後は自宅――語り手は本棚の前に立ち、1920年代当時の最新の歴史書を取り出して開きますが、一般女性の姿はそこにはありません。史実の乏しさを嘆きつつ、語り手はシェイクスピアに同じくらい才能のある妹がいたらどうなっていただろうかと考えます。作品を書こうとしても世間の嘲笑を浴びるばかりで、きっと一作も残せず自殺することになっただろう――と、その想像は暗鬱なものです。

しかしそうした先行世代の女性たちの失意と絶望を乗り越えて、娘たちは文学を、小説を、書き継いできた――と、「お話」後半で、語り手は女性文学史を熱く語り始めます。ここに来て「女性と小説」の「小説」は「女性」にしっかりと接続され、社会の中で疎外され攻撃されてきた彼女たちだからこそ、自己表現のために小説を必要としてきたことがわかってきます。最後に、語り手は本棚から女性が書いた本を次々に取り出しながら、自己表現から芸術へ、怒りの表出からいまだ書かれざる生の表象へと、女性が書くことの可能性を広げていきます。

以上、ウルフの「二日間のお話」をたどるとこんなふうになるのですが、ウルフが「女性と小説」をテーマにしながら、たんに過去の女性小説家の紹介にとどまらない、スケールの大きな議論を試みていることはおわかりになるでしょうか？　このスケールの大きさと、そして「お話」形式の読みやすさも相まって、*A Room of One's Own* は1929年という時期に発表されながら、その後1960年代に始まる第二波フェミニズムの中で大きな役割を果たしました。フェミニズム文学批評の先駆けとされ、いくつもの論点が取り出され継承されてきましたし、女性にほとんど注目してこなかった歴史研究の変化を促して、女性史という新分野の創出に一役買ったのでした。

さて、それほどの古典的名著であれば、邦訳を出すことはそれだけで意義がありそうですが、実は *A Room of One's Own* にはすでに三種類の邦訳があります。1940年に刊行、その後改訂を経て1952年に新潮文庫として改めて刊行された西川正身・安藤一郎訳『私だけの部屋』。1984年に松香堂書店から刊行された村松加代子訳『私ひとりの部屋』。そして1988年、みすず書房から刊行された川本静子訳『自分だけの部屋』。実際、今回新訳を出してみたら、わたしの周囲にはこれらのいずれかの訳書ですでに読んでいる人が数多くいらっしゃるようでした。Twitterでも「母親が文庫本で持っていた」などの書き込みを目にしました（「文庫本」というのは、たぶん西川・安藤訳のことでしょう）。

しかし、それでもいま新訳を出す意義はある――とわたしは考えています。理由は四つです。

第一に、出版から四半世紀も経つと、どうしても訳語は古びてしまいます。ごく小さな例を挙げさせてもらうと、作中で語り手が「プルーン（prune）」について語っている箇所がありますが、これまでの訳書では「乾李（ほしすもも）」「干しすもも」「干しプラム」。2015年現在の感覚で言えば、ここはさらっと「プルーン」と訳出したいところです。

第二に、四半世紀のうちにウルフ研究は大きく進展しました。これまでの訳書にもきわめて詳細な訳者注がついていますが、新訳では1990年代以降にわかってきたことも新たに注に含めました。たとえば語り手は「時折、女性は女性を好きになるもの」と言いながら、その当時の現役の内務大臣と裁判官の名前をさりげなく出しています。最近の研究によると、この二人は、作家ラドクリフ・ホールが1928年に出したレズビアン小説『寂しさの泉』を猥褻だとして発禁処分にした裁判の仕掛け人たち。ウルフはこの裁判に際してホールを弁護する声明文を出すなど積極的に関わっていましたが、こうして要人たちの名前を活字に残していることを考えると、彼女の当局批判はけっこう過激だったことがわかります。

第三に、ウルフが先鞭をつけたフェミニズム文学批評も、ずいぶん進展しました。ウルフが語り手に女性文学史を情熱的に語らせるとき、ウルフは当時手に入る資料に基づいてそうしたのでした。しかしその後、埋もれた女性作家が何人も再発見され、彼女たちの執筆状況が明らかになるにつれ、ウルフの女性文学史にもかなり修正が必要になってきています。たとえば17～18世紀の女性詩人アン・フィンチについて、ウルフは彼女がひっそりと詩を書いて世に出さなかったように想像していますが、実際には友人ネットワークの中で書き、出版もしていました。このように、ウルフがこうと判断して書いたことが、その後違うとわかり――という経緯はけっこうスリリング。それで訳文が変わることはありませんが、新訳では注と訳者解説でそのあたりの経緯に触れました。

最後に、*A Room of One's Own* にはこうして修正が必要になってきた箇所もあるものの、それでも86年のへだたりを越えて、現在なお考えたい論点が数多くあります。その最大のものが「女性が小説を書こうと思うなら、お金と自分ひとりの部屋を持たねばならない」というウルフの有名な主張。格差社会化しつつある現代日本においても、教養を身につけるのにお金がかかるのは切実な問題ですし、一般的な住宅事情からすると、既婚女性が自分ひとりの書斎を持つなんて、なかなか難しいものだと思います。はたまた、おひとりさまのワンルームが創造のための最適空間かどうかも、議論を呼ぶところでしょう。こうした論点をふくむ本書、読みやすい文庫サイズの新訳で、ぜひぜひお手に取っていただければ幸いです。

この連載では、毎号、執筆者が変わり、さまざまな話題をとりあげます。

新宿ベルク副店長 迫川尚子の食日記

新連載

迫川尚子

Sakokawa Naoko

種子島生まれ。写真家。新宿ベルク副店長。テキスタイルデザイナー、絵本美術出版編集を経て、1990年から「BEER&CAFE BERG」の共同経営に参加。商品開発、人事、店内展示などを担当。写真集に『日計り』、『新宿ダンボール村』、著書に『食の職』。

第1回 「つまむ」

自分の職業が飲食業なんて、まだ信じられません。夫が家族とカフェを始めた時、私も妻だからなのか誘われました。別の畑で順調に仕事していましたし、そんなヨメみたいなことは嫌だと断りました。飲食？　接客業？　無理！

結局、夫に「君はヨメなんかではない、共同経営者だ」とか、「僕は飲食店で働いたことすらない」とか（私は高校生の時に短期間バイトをしたことがあります）、「とにかく場所が面白い」とか（店は新宿駅構内にあります。そこで夫のご両親が20年間、喫茶店を経営されていました）わかったようなわからないような理由で言いくるめられました。それから25年、私はベルクの副店長として働き、食の本まで出しました。

でも、食のエキスパートと言われるとそわそわしてしまいます。私は料理をしません。そもそも食事をしない。つい最近です。料理や食事が習慣になったのは。食べるのが苦手なんです。異常に遅い。だから食べない。じゃーどうするか。つまむのです。お酒は大好き。珍味とか、酒のつまみになるものは口にします。店をやるまで会社勤めでしたが、お昼休みに同僚や上司とご飯を食べに行くのが苦痛でした。今は学校の給食は残していいのでしょうか。私の子どもの頃は許してもらえませんでした。皆が遊びに出かけても、一人教室に残って全部食べなければなりません。恥ずかしいやら申し訳ないやら。あのトラウマがよみがえるのでしょう。皆で一緒に食事するという事態をできれば回避したい。お酒なら、まだ付き合えます。ちびちび自分のペースで飲んだりつまんだり。30代の初めの頃に死にかけるまで、ひたすら飲み続けました。

結婚も、酒の勢いです。酔っぱらって何だかわからないうちに一緒に暮らしていました。ただ夫は私と正反対で、食事をしっかりとる人です。家でも外でも。食べるのが異常にはやい。二人で食べても、私の一口めか二口めで食べ終わっています。しょうがないから私の分をあげます。それも一瞬でなくなります。夫は男ばかりの三兄弟。食べることは競争だったのでしょう。私は弟が一人いますが、10歳離れているので一人っ子のようなもの。それが食べる速度にも関係しているかもしれません。夫はいつもお腹がいっぱいになる頃に味がわかると言います。味わう余裕もない。私は一口一口、味の形が克明に脳に刻まれます。外食では、せっかくだから私は相手と違うものを頼みたい。ところが、夫は私と同じものを注文してしまいます。シェアという概念がない。自分の分をしっかり確保するんです。最初は戸惑いました。でもそこまで違うと、酒のつまみになりますね。二人とも陽気な酒なので、「え？」とか「信じられない」とか笑いながら。

すみません、のろけているみたいですが、食べることにも生きることにも不器用な二人が、飲食店経営という食でひと様を楽しませる職業について、家では毎日酒を飲みながらお互いの生きざまや食べざまにずっこける。よくそれで25年やってきたものだと改めて思った次第です。

『味の形 迫川尚子インタビュー』（ferment books）好評発売中

Waseda Bungaku Free Paper

WB 早稲田文学 通巻1017号 vol.31

2015年12月10日発行　（年2回刊）

Published by　越川房子（早稲田大学文学学術院長）

Edited by　貝澤哉（編集人）
市川真人（制作総指揮）

青山南　大島一彦　丹尾安典　芳川泰久（早稲田文学運営委員会）
窪木竜也　北原美那　朴文順（早稲田文学編集室）
山本浩貴　小野実咲　小石川聖　永田祥子　中山みづき　杉浦宏樹　丸茂智晴　小林隼　村島康平　二宮明穂（早稲田文学学生編集員）

Design　奥定泰之（オクサダデザイン）
Photograph　篠山紀信 p01
Special thanks to　稲本洵　畑俊輔　平野竜太郎　青木誠也　吉本龍司　ふじたまさえ　阿部亨

編集・発行　早稲田文学会／早稲田文学編集室
169-8050　東京都新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学9号館地下1階
TEL/FAX 03-3200-7960
http://www.bungaku.net/wasebun/

印刷　シナノ書籍印刷株式会社
171-0014 東京都豊島区池袋4-32-8
TEL 03-5911-3355　FAX 03-5911-3356
http://www.shi-na-no.com

▼特集「ぼくたちはなぜ動かずにいられないのか？ 世界文学ケモノ道」はおかげさまで大好評。読んで下さった皆さん、責任編集の藤井光さん、ご協力下さった方々に御礼を。この特集で紹介される作品はどれもいま読むべき面白い作品です。冬号を片手に、いくつもの本を開いて、地図を見るように世界のあちこちに思いを馳せて頂けたら嬉しいです。(K)
▼谷川俊太郎さんは齢をとることを、新しいものが外側に重なっていく木の年輪に例えられています。p16からの谷原章介さんとの対話では、ふたりが「父」と「子」を自在に行き来しているようで、そばで聞いていて不思議であたたかい気持ちになりました。▽↓本誌「春号」も制作快調。それぞれどんな「組み替え」になるか、どうぞご注目ください。▽今号も、学生スタッフの頑張りに支えられて校了できました。いつもありがとう。(Ki)

早稲田文学 2016年春号　堀江敏幸 責任編集「足の組み替え」(仮)　2月7日発売
山下澄人 山浦玄嗣 小出裕章 石内都 ほか

これから、俺たち、どうすりゃいいんだ。そうだ、ベルクへ行こう
生ビール ¥315　コーヒー ¥210
Beer & Cafe BERG
☎ 03-3226-1288
http://www.berg.jp
↑ベルク通信、全バックナンバーがご覧になれます。
JR新宿駅東口改札出てすぐ（ルミネエストB1）
WB常設。コーヒーのお供に。

カーリル×WB ウチのオススメ

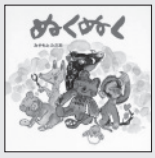
レシピ版

LOVE こたつ!

図書館横断検索サイト「カーリル」のレシピ機能。
お好きな本を集めてレシピをつくり、いろんなひとに届けることができます。
ここでは、そのなかから、WB編集部クボキがピックアップ!

世界は「自分と自分以外」でできていることを実感する3冊

『さようなら、コタツ』
中島京子
「部屋の数だけ人生はある。」まえがきで作者が言うように、いろいろな部屋を舞台にした短編集。



『ぬくぬく』
みやもとただお
こんなおばあちゃんいいな。心もぬくぬくあったかくなる絵本です。

『みかんです』
川端誠
こたつで食べたりあぶりだしに使ったり、お風呂に入れたり、冬はやっぱり「みかんです」!

ぬくもりが恋しい人にオススメ

まだまだ寒さが厳しい日が続きます。ぽかぽかと暖かい春が恋しいですが、寒い今の時期だからこそ楽しめるものもあります。そのひとつが“こたつ”。外から帰ってきてサッとこたつにもぐり込んだときのほっとする感覚は、夏では味わえません。こたつに入ってみかんを食べながら、本を読んだり編み物したり、ごろごろしたり。残りの冬をこたつで楽しみましょう!

中津川市立図書館さん　中津川市立図書館の公式アカウントです。
このレシピの URL
https://calil.jp/recipe/5842978218180608

『大正時代の身の上相談』
カタログハウス編
時代による感覚の違いはあるが、他人の頭の中って一つの宇宙だなと思わされる。

『非常階段東京』佐藤信太郎
非常階段から撮影した東京。ゴミゴミして美しい世界にぎゅっとつめられている私達を実感する。

『LOVE』
古川日出男
街ですれ違ったあの人もその人も、私の世界の一部なのかもしれない。

客観的になりたい人にオススメ

生きていると、ついつい「自分が、自分が」と、自己中心的になってしまうこともしばしば。

そんな時この3冊を読むと「世界は自分と自分以外でできている」という当たり前の事実を再確認できるような気がします(さらに言えば、そんな世界で生きていかなきゃいけない厳しさも…)。

世の中にはいろんな人がいますよね本当に!!

zimaeriさん　大学で文芸を専攻していました。読書は幼い頃から好きです。
このレシピの URL
https://calil.jp/recipe/10146005

きみのウチはもうこたつを出した?　この季節、おうちに帰ってこたつに入ると、もう出られなくなっちゃうよね。

『さようなら、コタツ』には、7つの部屋についてのお話が入っているよ。嬉しかったり悲しかったり、こたつで読んでるだけで心の中は大冒険だね。

『ぬくぬく』に出てくるおばあちゃんちのこたつには、ふしぎな秘密があるみたい。ぼくもいっしょに入りたい!

宅配便でいっぱい届いたみかん、さてどうしよう?　そんなときには『みかんです』。川端誠さんは、りんごとかバナナとか、いろんな果物のご本も出しているんだって。

家のなかで使うほうごたつを最初に作ったのは、バーナード・リーチさんってひとなんだって。志賀直哉さんが、リーチさんのおうちに遊びに行ってこたつを見たときのことを書いているよ。リーチさん、ありがとう!　みかん、食べる?

『大正時代の身の上相談』には、約100年前の新聞に載った、129人のお悩みが載ってるよ。みんな一生懸命相談しているんだけど、なかにはビックリしたり、笑っちゃうものも!

わ、キレイ!『非常階段東京』には、夕暮れから夜の東京がおさめられているよ。非常階段からの高すぎない角度で眺めているんだね。この光ってる家やビルのなかひとつひとつに、ご飯をたべたり仕事をしたりしているひとがいるんだよね。明かりはいくつあるんだろう?　1、2、3……いっぱい!

「世の中にはいろんな人がいる」って感じられる2冊を教えてくれたzimaeriさんが、あわせて教えてくれたのが『LOVE』。こっちは、出てくるお婆ちゃんやミュージシャンたちが、それぞれの物語を持ちながらつながっていくんだね。猫もいっぱい出てくるよ!

自分以外のひとがいることが、苦しいだけじゃなくてうれしいことに思えたらすてきだね。

「カーリル・レシピ」で本を紹介してくれる人、大募集!

→「カーリル・レシピ」に登録すると、あるテーマの本を3冊以上集めて、書籍を紹介できます。テーマ設定は自由。レシピは3ステップで作ります。
❶まず、オススメしたい人とタイトルを決めて、❷本を3冊以上選び、❸思い入れを書き込みます!　準備ができたらはじめましょう。
カーリル・レシピ URL　**http://calil.jp/recipe**

本を借りるならカーリルで!　http://calil.jp/

今日のカーリル
カーリルの検索がスピードアップ♪お気に入り図書館も増えてパワーアップしています!

我思う、ゆえに生命あり

第6回

Genome (Re) Mapper

八代嘉美
Yashiro Yoshimi

76年生。専門は幹細胞生物学。再生医療研究と、SF小説・マンガ・アニメの文化批評を通じて、新しい生命観・身体観の構築を試みている。さらに、広く科学技術と社会の関係性について精力的に執筆をつづける。著書に『増補iPS細胞　世紀の発見が医療を変える』、『再生医療のしくみ』（共著）など。昨年度から中日ファンに復帰しました。

前回は「合成生物学」、あるいは「遺伝子操作」について取り上げました。合成生物学が持つ目標の一つである、生命をヒトの手で、全く新しくつくり上げることは、まだしばらく先の未来の話と言えるかもしれません。しかし、もしかすると「遺伝子操作」はもう少し早く、わたしたち自身に関わる領域へとやってくるかもしれません。遺伝子操作、というと、古典的なSFではだいたいが受精卵に遺伝子操作を行って望み通りの子孫を得ようとする「デザイナーベビー」の出現を危惧するものがよく知られています。

たとえば、映画「ガタカ」などは、その最も有名な例といえます。そも舞台となっているのは、出生前の遺伝子操作によって優れた知能と体力、そして美しい外見を与えられた「適正者」と、そのような操作を受けることなく、つまり「欠陥」のある遺伝子を持つかもしれないまま産まれた「不適正者」との間に、厳しい差別がある近未来世界です。ただ、それを実現させるにはさまざまな技術的障壁があり、そう簡単なものではないと考えられてきました。しかし、それを変えるかもしれないのが「ゲノム編集」という技術です。

このところ、ゲノム編集という言葉は新聞やテレビなどで大きく取り扱われるようになりました。そのきっかけとなったのは、少し前、中国の研究グループが発表した論文です。こどもがほしいカップルを対象に行われる人工授精という方法では、一定の確率で発生できない受精卵ができてしまいます。通常こうした細胞は廃棄されることになっていますが、中国のグループは、こうした受精卵のβグロビンという遺伝子に、「βサラセミア」という病気を発症するように書き換える試みを行ったのです。

この論文は世界中で大きく報道がなされました。その報道では、大体の記事が「倫理的に問題がある」という趣旨のことを書いていました。しかし、すでに遺伝子を操作すること、すなわちゲノムへと編集を加えるような行為が生命科学研究では欠かせなくなっているのに、なぜ新たに倫理的な問題を指摘されたのでしょうか。端的に言えば「劇的に簡単になったから」です。

先に述べたとおり、遺伝子を操作すること自体はすでに生命科学ではポピュラーなものでしたし、一部の細胞に正常な遺伝子を組み込むことで治療効果を発揮させる「遺伝子治療」という形で、ヒトへの応用も行われてきました。しかし、実際に両親が望むような見た目や性質という、個体レベルで実現される遺伝子組み換えを行うためには、ゲノムが複製されるときに偶然おこる「相同組換え」というものに頼らざるを得ず、しかも数世代にわたって個体の交配を必要とするために、ヒトへの応用はナンセンスとでもいうものだったのです。

しかし、ゲノム編集では目的の遺伝子の場所に直接働きかけ、その配列を置き換えることができます。中国のグループはβグロビン上にある数分子からなる目標の位置を正確に狙い、その場所を切断したり、人為的に置き換えることを目指しました。その結果は、実験を行った52％の受精卵で切断が成功し、7％では置換が成功した、というものでした。つまり、実際に発生することができる、すなわち生まれてくることができる受精卵を対象にして行えば、人為的にβサラセミアを引き起こすことができたわけです。

もちろん、この技術は病気を起こすために使われる技術ではなく、遺伝的に疾患を持つ患者を治療するための技術です。実は、すでにこのゲノム編集の技術を応用した遺伝子治療については世界で2例の実施例が報告されています。一つは、HIVウイルスの感染、つまりエイズウイルスがヒトの免疫細胞に感染するための「入口」にあたるタンパク質を破壊するために用いた例、そしてもう一つは遺伝子異変によって急性リンパ性白血病を発症し、骨髄移植や抗癌剤治療によっても治療することができなかった新生児に対する治療でした。どちらも、血液の源となる造血幹細胞にゲノム編集を加え、治療効果を発揮させようというアプローチでした。ともに、現在のところ一定の成果がでてはいるようです。

では、ゲノム編集をヒト胚に応用する問題点は何でしょうか。ひとつは、生まれてくるはずの子供がその技術に「同意」をしたわけでない、という点を挙げることができます。そしてもうひとつが、お馴染みの「デザイナーベビー」をつくることができる、という問題点です。技術的な面でも、今回の中国のグループはこうした議論が成熟していない隙間を突いた、ということを問題にすることもできるでしょう。論文によれば、オフターゲット（標的以外）の部分の組み換えが大量に起こってしまい、結果として、技術的な観点からもゲノム編集をヒト胚に適用する困難さが示されており、未完成な技術をヒト受精卵に行うことの問題も浮き彫りにしています。

そして、現在の遺伝性疾患患者に対して、不当な差別が産まれるということを危惧する人もいるようです。しかし、いま苦しんでいる患者への差別を行う、ということと、疾患を根絶させるということとは切り離して考えることができるはずで、ゲノム編集が今後重要になることは間違いありません。すでにいくつかの国際的な生命科学の学会は、ゲノム編集を胚に適用することの性急さを指弾する声明を出しています。ただそれらは将来に禍根を残さないために議論の必要性を説いており、科学的・医学的な意味を踏まえ、応用に前向きな色彩を帯びるものになっています。

デザイナーベビーの論点にしても、技術的、科学的な見地から考えれば、両親が望む形質をすべて充足する形質が、先天的に得ることが可能と考える生命科学者はほとんどいないでしょう。「ガタカ」の主人公であるヴィンセントは不適正者として生まれながら、自らの夢を果たすために努力を重ね、適正者たちを乗り越えていきました。

転ばぬ先の杖、滑りやすい坂道、といった「先回りの心配」を抱く心情はわからないではありません。しかし、未知のものであるからといって、実際の科学的な知見を取り込まずに、いたずらに心配することが本当に意味があるのでしょうか。むしろ、人間が持つ可能性や多能性を、自分たちが理解できる範疇内にとどめておきたいだけの欲望なのではないでしょうか。結局のところ「ガタカ」の結末は、誰かが道をつくってくれていようと最後は本人が何をどうしたいのか、に立ち戻ることを示しているのかもしれません。

記憶よ、語れ
自伝再訪
ウラジミール・ナボコフ
若島正訳
過去と現在、
フィクションとノンフィクションの
狭間を自由に往き来し、
夢幻の世界へと誘う
ナボコフ「自伝」
ナボコフ研究の第一人者による
完訳決定版！ ●3400円

2014年ノーベル文学賞に輝く
《記憶の芸術家》パトリック・モディアノ、
魂の叫び！
迷子たちの街
平中悠一訳
ミステリ作家の「僕」が訪れた二〇年ぶりの故郷・パリに、封印された過去。《亡霊たち》とのデッドヒートが今はじまる――。
●1900円

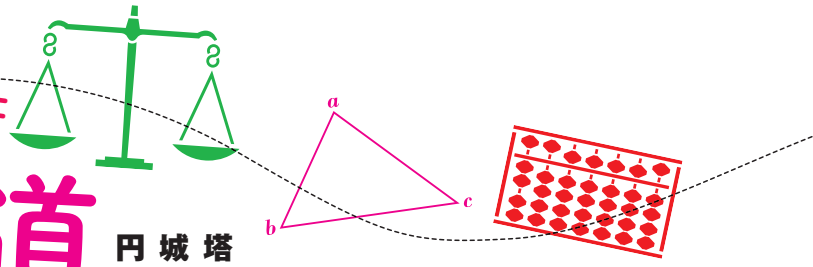
●これぞリディア・デイヴィスの真骨頂！
サミュエル・ジョンソンが怒っている
強靭な知性と鋭敏な感覚が生み出す、摩訶不思議な五六の短編。
岸本佐知子訳
《最新刊》
●1900円

●リディア・デイヴィス、待望の長編！
話の終わり
岸本佐知子訳
《2刷》●1900円

ノーベル文学賞作家の最新刊！
嵐
ル・クレジオ
●2400円
韓国南部の小島、過去の幻影に縛られる初老の男と少女の交流。ガーナからパリへ、アイデンティティーを剥奪された娘の流転。ル・クレジオ文学の本源に直結した、ふたつの精妙な中篇小説。中地義和訳

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 価税別
TEL03(3262)9753　FAX03(3262)9757

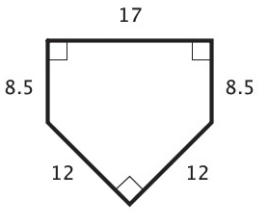
数学への長い道



円城塔
EnJoe Toh

72年生。大学で物理を研究していた理系作家。『道化師の蝶』で第146回芥川賞を受賞。近刊に短篇集『シャッフル航法』、3年ぶりの長篇小説『エピローグ』、初の私小説『プロローグ』、さらに『池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集11』では上田秋成「雨月物語」を現代語訳。

第10回　「言えない」って言えない



たとえば、こんな設計図を渡されたとします。野球のホームプレートみたいなものです。

さあて、はりきって作っていくぞ。っていっても簡単なのですぐにできます。

でもそれって本当でしょうか。

この五角形の尖っているところと、四角い角の三つが直角だとしてみましょう。じーっと眺めてみてですね。この長さ 8.5 のところをすっと縮めた二等辺三角形を想像しましょう。

そうすると、底辺が 17 で、長さ 12 の辺が二つある三角形が見えてきます。さらにそいつは、直角二等辺三角形であることもすぐわかります。尖ったところは直角だとしたのだからそうなります。

直角三角形というと、誰もが知っている定理がありますね。ピタゴラスの定理です。$a^2+b^2=c^2$。呪文のように覚えているはず。

ということは、この設計図は、$12^2+12^2=17^2$ を主張しているということになるわけですが、$12^2+12^2=288$ です。$17^2=289$ ですね。とても近い数字ですが、ちょっと違います。ということは、こういう寸法の直角三角形はこの世に存在しないわけです。

さてここで、「どうでもいいではないか」と思うか、「いや、あれ、なにか気持ち悪い」と思うかどうかは結構大きな違いです。

野球のホームとして使う分に、実用上は問題ない。それはそうです。実際これは、メジャーリーグ・オフィシャル・ルールブックやリトルリーグ・オフィシャル・ルールブックで指定されていたサイズとして有名だったりします。

この世にはギリシアの三大作図問題というものがあって、「そういう作図はできない」ことで有名です。こんなのですね。

「目盛りのない定規と、コンパスのみを使って」

・与えられた円と同じ面積を持つ正方形を作図すること。

・与えられた立方体の二倍の体積を持つ立方体を作ること。

・与えられた角を三等分すること。

これって、意味のわからない人には本当に意味がわからない文章で、角を三等分できない？　分度器で測れば？　となります。円の面積は、パイアールジジョウとか、平方根を習ったのは何のためだったのか、という気分にもなるってものです。

ここで大切なのは、「目盛りのない定規と、コンパスのみを使って」のところです。紙は使わないのかとか、鉛筆は要らないのかとか、この宇宙は要らないのかとか、そういう野暮は言いっこなしでいきましょう。

これはあれです。飛車角落ちの将棋みたいなものなわけです。それとも、特定の技や武器を使わない縛りプレイでゲームをクリアしようとするようなものです。とりあえず。

ルールを決めてその枠内で楽しむわけです。「俺はナイフだけでこのゲームをクリアするぜ」とか言ってる人に、「なぜそんなことをするのか」と言ったって無駄です。趣味です。

個人の趣味を人におしつけるな、と言いたくなるかも知れないですが、もう少し。

そのナイフだけで戦うゲームをやっていた人があるときふと気がつきました。「もしかしてこのゲームって、ナイフだけではクリアできないのでは？」

でも。「〜できない」という証明は一般的にとっても大変です。「この子は将来、立派な大人になれるだろうか」「なれない」という証明なんてされてはたまらんわけです。

だからふつうは、そのゲームをナイフだけでクリアできるかどうかはわからない。どうやってもクリアできないのかも知れないし、腕が上がればクリアできるのかもわからない。

ギリシアの三大作図問題のエライところは、「そういう作図はできない」、「その縛りプレイではゲームはクリアできない」と証明できてしまったところにあります。

証明できた、と一言で言いましたが、紀元前から知られていたこの三大問題が解決されたのは、実に十九世紀の出来事です。軽く二千年以上、人類はその縛りプレイに挑んでいたりしたわけです。

扶桑社の文芸本

笑って泣いて心に沁みる、破天荒な名随筆
[扶桑社文庫]
赤めだか
立川談春
●定価：本体650円＋税
12/28 TBS系ドラマ化

無頼の私小説書きによる、ヒントに満ちた多彩な話
風来鬼語
西村賢太対談集3
●定価：本体1,600円＋税
12月中旬発売

超世代文芸クオリティマガジン　http://twitter.com/en_taxi　ホームページからのご注文も可能です。全国の書店で発売中!

en-taxi
ODAIBA MOOK　No.46 WINTER 2015

[付録] 総目次 vol.1〜46

[エンタクシー] 46号 FINAL! ISSUE
A5判 定価：本体880円＋税
責任編集
坪内祐三　福田和也
リリー・フランキー　重松清

[特集] エンタクシー省察
[同人勢揃い座談会] 福田和也×坪内祐三×重松清×柳美里×リリー・フランキー
●福田和也「エンタクフラッシュバック」
●柳美里「今だから言えること」

[シリーズ] このひとについての一万六千字
北村薫「バトンを渡された者として」
取材・文 重松清

[小説] 松井周「お似合い」
黒木渚「壁の鹿」
山内マリコ「AIBO大好きだよ」
川村毅／藤田貴大

[TALK] 能町みね子×西村賢太
岸政彦／加藤千恵
児玉竜一／泉麻人
大村彦次郎／岡崎武志
津村記久子／絓秀美
吉田司／ホンマタカシ

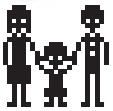
FU SO SHA 扶桑社　〒105-8070 東京都港区芝浦1-1-1 浜松町ビルディング10F www.fusosha.co.jp　[エンタクシー バックナンバー]書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

〈社会〉の思考

第8回 集団的自衛権とパリ同時多発テロ

大澤真幸
Ohsawa Masachi

『〈自由〉の条件』や『ナショナリズムの由来』など、社会構造の観察と本源的理性への思考を綜合する思考を繰り出し続ける社会学者であり思想家。同時にスポーツや文学の批評も手がけるなど、フィールドを横断した活躍をみせている。初期論文集『社会システムの生成』好評発売中。



私は、日本が集団的自衛権をもつことに反対だが、今は、その点はおくとして、パリで、11月13日の夜（現地時刻）、ISによる同時テロが起きて以降、とてもふしぎだと感じていることがある。テロの二ヶ月前まで、日本人は、集団的自衛権の是非についてずっと考えていたはずだ。まさに国論を二分するという表現が相応しいかたちで、賛成派と反対派が激しく論争してきた。安保関連法が国会で議決されて以降も、この論争の余波の中に日本人はいる（はずだ）。そして、法は一般に改正したり撤廃したりすることが可能だし、その根拠になるべき憲法はまだ改正されてはいないのだから、今後も、この問題をめぐる議論は続く（ということになっている）。このような情況の中で、パリでの悲惨なテロが報じられた。とすれば、集団的自衛権に賛成の者も反対の者も、まさにこのテロに関連させて、自らの見解を発表すべきではないか。なぜなら、この事件は、集団的自衛権の是非を考える上での、最高の実例となっているからである。なぜ、どちらの陣営も、このテロに関係づけて、自らの考えを表明しないのか。ふしぎである。

念のために述べておけば、このテロへの反撃として日本が集団的自衛権を行使すべきかどうかを議論せよ、と言っているのではない。この点についてならば、結論ははっきりしているだろう。そうではなく、今起きていることを一般化して捉えたとき、それは、集団的自衛権とは何を意味するのか、それを行使することは正義にかなっているのか否か、そうした問題を考える上での格好の素材になっている、ということである。集団的自衛権についてずっと真剣に考え抜いている人は、自然と、このテロに敏感にならざるをえないはずだ。自分だったら、たとえば自分たちがフランスの隣国だったら、どうすべきなのか、テロのターゲットになった都市が、同盟国アメリカのニューヨークやワシントンだったら、どうすべきか、あるいは隣国の首都ソウルでテロが起きたら、等と。

集団的自衛とは、本来、次のような発想である。友人への攻撃は、私への敵対と同じであると考え、友人と一緒に防衛しよう、と。日本の安保関連法では、わが国の存立危機事態においてのみ集団的自衛権を行使するという、奇妙な限定が（今のところ）付けられているが、この限定は、自家撞着的なものであり、おそらく、（日本がこの法律を今後も維持した場合）長期的にはなし崩し的に無効化されるだろう（この件について、詳しくは、『Thinking「O」』13号（左右社）に収録した拙論を参照）。

アメリカもロシアも、パリでテロが起きるとすぐに、テロリストを厳しく批判し、フランスと一緒になって、ISへの空爆を強化した。言わば、集団的自衛権を行使したのである。

では、集団的自衛権をもたない、あるいは行使しない、ということはどういうことなのか。たとえば、今回のように、友人（フランス）に、とてつもなく正義に反する攻撃が加えられた、としよう。それでも、友人とその敵との戦いには参加せず、「喧嘩」が終わるのを座視していよう。……これが、「集団的自衛」を拒否する、ということについての日本人の標準的な理解であろう。実際、こういう態度を指す、仰々しい学問的な名前さえある。「諦観的平和主義」（「喧嘩が起きたら、あきらめて喧嘩が終わるまで見ている」主義）がそれである。だが、それはよいことなのか。立派なことなのか。あらためて考えてみる必要がある。もし、どこかの国がこう言っていたら、それは賞賛すべき正しい決断なのか。「フランスはたいへん気の毒だが、自分で勝手に敵（IS）と戦うべきだ。私は勝敗が決するまでじっと待っている」。

少なくとも、次のように言うことができる。もしすべての国が諦観的平和主義を採用するならば、「平和」どころか、逆に、そのことは多くの国に戦争への誘因を与えることになるだろう。どんなに正当性がない戦争をしかけても、他国が介入してこないならば、武力によって自分に有利な状態を作ってしまったものが得をする、ということになるからだ。諦観的平和主義の一般化は、戦争を増加させるのだ。言い換えれば、一部の国が諦観的平和主義に立っていても、世界がそこそこ平和であるとしたら、他の大半の国が、少なくとも戦争が強い国が、諦観的平和主義をとっていないからだ。この場合、諦観的平和主義者の前者は、後者が作った平和にただ乗りしている、ということになる。

それならば、今度は逆に考えてみよう。今回のテロで、フランスと一緒にISを空爆することは、つまり集団的自衛に参加することは、よいことなのか、正しい選択なのか。冷静に考えれば、これも明らかに間違った選択である。友人（フランス）にこんなひどい仕打ちをしたISに復讐したくはなるだろうが、ISへの過激な攻撃は、テロを撲滅するどころか、テロの危険性をむしろ高めるからだ。友人を助けるつもりで、一緒に敵を攻撃すれば、友人を、そして自分自身をますます窮地に追い込むことになる。

つまり、今回のテロは、集団的自衛（権）という発想自体に内在する限界をあぶり出しているのだ。集団的自衛権にそった行動も、またそれを否定した行動も、どちらも悪い選択肢になってしまう。とするならば、結局、主権国家が、自分一人でか（個別的自衛）、あるいは仲間とつるんでか（集団的自衛）、どちらかによって平和と正義を維持する、という基本的な枠組み自体を変えなくてはならない、ということになるだろう。

あなたが集団的自衛権の是非について考えてきたつもりでも、もし、現在のフランスのテロをめぐって深く悩むことがないならば、集団的自衛権について本気になって考えてはいなかった、ということである。

November 25, 2015

講談社◆話題の文芸書

Photo/渡辺充俊

ウォーク・イン・クローゼット
綿矢りさ

定価:本体1,400円(税別)
ISBN978-4-06-219757-1
講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

2年ぶり
最新小説

28歳OLと幼なじみの人気タレント。
イケメン新進陶芸家と女ストーカー……
読みはじめたら止まらない、
コミカルでせつなくて
少しブラックな魅力の注目作！

と、フィードバックのようなものがもらえて、すごく元気になります。

谷原　たとえば、子どもたちがおもしろい詩を読んでげらげら笑ってくれたり？

谷川　そう、反応が大きいのがいちばんうれしいですね。大人がしーんとしてくれるのもいいんだけど、どう思ってるかよくわからなくて、ちょっと不安になっちゃう。一緒に演奏している息子がときどき助け舟を出して、「詩の終わりも拍手していいんですよ」と言ってくれて、やっと拍手が起こったり（笑）。

谷原　いま、どれくらい人前で朗読されてるんですか？

谷川　あんまり数えてないけど、年間三十ぐらいやってるかな。

谷原　そんなに！

谷川　まあ、息子と一緒にやることもあるし、対談とかに呼ばれて読むこともあるし。なにしろ詩集は売れないからね。

谷原　以前谷川さんは、「詩は売れないけれども、詩情はどんどん街にあふれていってる」ということをおっしゃっていて、かわいいものや綺麗なものも詩情の一種なんだ、とお話されていました。実感として理解しつつ、やっぱり声に出しても黙読でもいいから活字と向き合って、自分のなかで何回も読んでそのたび何かを発見したり、少しずつ自分のなかに貯めていったりすることのほうが、「かわいい、キャー」と消費していくことよりも、とても大事なことのような気がするんですよね。

谷川　詩は繰り返して読めますからね。ファッション的なかわいいものや、詩であっても現代詩じゃないような、我々から見ると詩情が薄められたものじゃないと、世のなかのたくさんの人のところには流れていかないのかもしれない。現代詩は濃すぎるんです、きっと。

谷原　純粋すぎるということでしょうか？

谷川　純粋とも言えないんですけどね。

谷原　日本でいっとき、詩がすごく読まれた時期もありましたよね。なぜだったんでしょう。

谷川　たとえば一時期のソヴィエトとか韓国で、すごく詩が売れたことがありました。それは、体制の締め付けが厳しいときは政治批判ができないから、詩であれば曖昧なかたちでそうした批判ができることも理由だったと聞いたことがあります。だから詩が売れた年代というのは、社会が何かの意味できつくなっていたのかもしれない。

谷原　そういった意味で、いまだんだんきつくなっているこの日本で、もしかしたら詩の果たす役割はこれからどんどん大きくなっていくのかもしれないですね。

谷川　そう思いたいですね。ただ、いまの社会は流動して複雑化してるから、詩で対応していくのは難しくなってるとも思うんですけどね。

＊

谷原　先ほど息子さんとステージに上がられているお話がありましたが、いまお孫さんは何人いらっしゃるんですか。

谷川　四人。十二月に孫娘に赤ん坊が生まれるとひいおじいちゃんになる、という危機にさらされています。

谷原　「危機」ですか（笑）。そんなにお孫さんが大きいと、もう「おじいちゃんと孫」みたいな密な付き合いではないですか。

谷川　うん、冷たいと思われるかもしれないけど、みんな孫をすごくかわいいって言うじゃないですか。ぼくも別にかわいくないことはないんだけど、ぼくの友だちみたいに、孫にべたべたする気がぜんぜんないの。孫とも対等に付き合っていればいい、みたいな感じなんですよね。いまは孫も大人だし、もう仕事上の付き合いです（笑）。

谷原　でもさすがに、ひ孫はかわいいかもしれないですよ。

谷川　いや、ダメなんじゃないかな（笑）。それはぼくは父親の血をひいてると思いますね。父も、自分の子どもであっても、対等に喋れるまでは付き合いかたがわからなかったようなひとでした。ぼくが詩を書き始めたら、「自分のテリトリーに入ってきた」と喋れるようになったみたい。

谷原　そのときに、上から押さえつけられるようなことはなかったんですか？

谷川　そういうことはぜんぜんなくて。ただぼくが詩を書いてるノートを見せたら、それに丸とか三角とか二重丸をつけてきたんですね。当時は若いから「なんで丸つけんだよ！」と思ったけど（笑）、後で見たら、それは正確な評価でしたね。彼はちゃんと文学を知っているひとだったから、詩が評価できたんだと思いました。

谷原　ひとりっ子だとおっしゃってましたが、お父さまが、「よし、今日は銀座でうまいものを食わせてやろう」みたいなこともなかったんですか？

谷川　父は食道楽ではあったけれど、いまの親子関係と違って昭和の初期は、父親が子どもにおいしいものを食べさせに外に連れて行くという発想がないし、外食自体も非常に少なかったからね。でも言われてみれば、子どもの頃、銀座のレストランみたいなところに行った記憶はありますね。初めて「リグレー」のチューインガムを買ってもらって。昭和の十一、二年ごろかな、まだチューインガムが珍しくて、そこで初めて知りました。当時は地下鉄もないから、銀座に行くのもアメ車の円タクで。ぼくはその頃から車好きだったから、運転手さんに「これ、ダッジだね」とか言ったら、運転手さんが喜んでカタログをくれたりしましたね。すごくうれしかった。

谷原　すてきですね。ぼくは三人兄弟の真んなかで、家族で外食に行っても、ほかの兄弟の頼んでる様子を見てバランスをとる癖がついてしまっていて、「この予算内だったらこれでいいかな」ということばかり考えてました。兄弟が豪華にチャーシューメンを頼んでるところ、自分だけふつうのラーメンで、とか（笑）。

谷川　でも、子どもの頃からそういう発想だったのは、いまの仕事にすごく役立っていますよね。子どもってなかなかそういうふうに気が回らないもの。三人兄弟でよかったね。

谷原　言われてみると、そうかもしれません。あの頃はマイナスしか見えなくて、ひとりっ子が羨ましかったです。なんでも買ってもらえて、争いなんかしなくてよくて。

谷川　でも、親がぼけたりするとひとりっ子は大変なんですよ（笑）。谷原さんは子だくさんなんでしょう？

谷原　六人います。で、父とも同居してます。いま七十七ですけどまだ元気で、いちばん下の子がいま八ヶ月なんですけど、その子の面倒を見てくれて、毎朝散歩に連れて行ってくれるんです。

谷川　ああ、いいですね。

谷原　ただ、父はヘッドホンをしながら、ベビーカーを押しているらしいんですよね。それが心配で。

谷川　ずいぶん気が若いね、でもそれは危なくない？（笑）　ちゃんと子どもの親として注意しなきゃね。

谷原　父は正面から言うとしゅんとしちゃいそうです。どちらかといえば、お婆ちゃんみたいなひとなので。

谷川　じゃあ、女性を口説くような感じで言ったら？　しんみりと（笑）。

谷原　実の父親を口説く（笑）。手紙を書いて渡すのもへこみますよね。

谷川　ああ、それはきついかもしれない。ぼくは、ぼけた母に毎晩のように書き置きを見せられて、もう本当につらかった。

谷原　なにが書かれているんですか？

谷川　父親の悪口（笑）。うちの母は父に全生涯を捧げたようなひとで、ベタ惚れに惚れていたんです。父はぼくが産まれてから浮気し始めて、母はその時期はじっと耐えてたんだけど、ぼけたらその恨みつらみが出てきちゃった。だから「あなたのお父さんはああだった、こうだった」と昔の話として書いていると同時に、ぼけているから「いま玄関に女のひとが来ています」みたいな話になっちゃう。

谷原　それは大変ですね。

谷川　ぼくは老人の介護について、それで随分訓練されました。自分で縛りをつくるしかないんですね。「同じことを繰り返す」っていうのが認知症の初期にあるでしょう。その同じ問いに、こっちが違う答えを工夫していくことで、創造的に対応できるんです。

谷原　ついイライラしちゃいそうなところですが、言っていることを否定しないんですね。

谷川　もちろん。受け流して、ちょっとおもしろい物語をつくる。そんなことばかり考えていましたね。

谷原　なるほど、そこでも創造性を発揮される訳ですね。

きょうここに来るまで、ずっとお会いしたかった谷川さんと何を話そうか、「いっそずっと無駄話をしていたい」とまで思っていましたが、まさかぼくの家族の話までさせていただけるとは（笑）。幸せな時間を、ありがとうございます。

谷川　こちらこそ、ありがとうございました。子どもたちによろしくね。

（2015.11.14）

＊本連載の出張版（ゲスト：西川美和）が『早稲田文学 2015 年秋号』に掲載されています。

谷原章介　Shosuke Tanihara　72年生。抜群の演技力と表現力で、テレビドラマに映画に舞台にと、硬軟様々な作品に出演。プレイボーイの独身貴族から変わり者の研究者、稀代の名軍師まで、幅広い役柄を演じる。また、TBS系情報番組『王様のブランチ』MCをはじめ、司会やナレーション、ナビゲーターなど幅広い分野で活躍。読書家としても知られる。

で成り立っていて、みんなこうやって意味で交流してるわけだけど、詩には、意味ではないものが含まれているんですよね。それは言語の音楽的な要素とも言えるし、また、意味の広がりかた、ことばの持つ含意も、散文とは違ってきます。含意どうしの結びつきで詩は成り立っているから、一行の意味がわかっても詩をぜんぶわかるわけじゃない。それがあって、読みかたによっていろいろ変わってくるんじゃないかな。

谷原　含意を受け手がどんな大きさで、どうとらえるかでも変わってきますものね。以前拝読したインタビューで谷川さんは、ことばの意味が固定されると、そこに囚われてしまう、というお話をされていましたが、確かに、もともとことばは、その事象やものの後に生まれたはずなのに、ことばの方が先に存在していたような気がしてしまいます。

谷川　そうですね。まず存在があってからことばができた。ぼくはよく「ことばの被膜」というんだけど、ことばで存在を表現すると、存在に対して膜がかかっちゃうんですね。それを破りたい、というのが詩なんです。

谷原　すこしずれるかもしれないのですが、たとえば悪いことを表現することばは、自分から悪いことをして生まれてきたのではなくひとが作ったものなのに、ひとはそのことばを避けたりします。谷川さんのエッセイ集の『ひとり暮らし』のなかでとても好きなのが、「私はうんこ、しっこが生きることの究極の現実だと思っている」という一文なんですけれど、谷川さんは作品のなかでも、そうした、ひとが忌避することばを使うときもありますよね。それも「膜を破る」ことにつながるんでしょうか。

谷川　ぼくにとって単語は、音楽でいう音符みたいなものなんですよ。音符っていうのは完全に平等でしょ？　音符と音符の関係でメロディができたり、リズムができたりする。だからうんこ、しっこもあるいはもっと尊いお言葉も（笑）、ぜんぶおんなじ。

谷原　日常で汚いことばを使ったりすることもありますか？

谷川　それはあまりないですね、ぼくはひとりっ子で、けんかができないひとだから。だいたい、日常言語と作品言語は意識のなかで分けてますね。日常言語はひととの付き合いのなかで使うわけだから、ある程度ちゃんとした枠のなかで使わなきゃならない。それを、詩の作品言語といっしょにすると、ちょっと混乱する感じがします。よく「この詩でなにを言いたいんですか」と言われたりします。「詩というのはメッセージと違って、なにかを言いたいから書くんじゃないんだ」と言うんだけど、なかなか理解されない。そこでも日常言語と作品言語の違いがあって、おなじことばを使っていても、どこか次元が違うんですよね。

谷原　なるほど。ぼくも芝居やナレーションのお仕事で、ひとに聞いてもらう前提でしゃべる台詞には、意味だけじゃなく、音や音楽に近いものを感じます。聞いていて、「なんかこのひとのしゃべり方は耳ざわりがよくない」とか「ここからメロディが違ってるのかな」と思ったりすることもあります。キーの高さやテンポだったり、間だったり、「声音」ということばもありますが、たしかにとても音楽的なものだな、と思います。

谷川　詩でも、活字で読んでいてもなんとなく声が聞こえてくるんですよね。その声が、いまおっしゃったように一種の調べを持っていて、それが生理的に合わなかったり、リズムがちょっと違うな、と感じたりする。意味だけじゃない、ことばのそういう側面が、詩の場合は特に大事なんじゃないかな。

谷原　谷川さんはそれこそ、曲と合わせるタイプの詩もたくさん書いていらっしゃいますよね。そういうときは曲があって詩を書く、それとも詩を書いてから曲をつけるんですか？

谷川　ほとんど詩が先ですね。曲先は「鉄腕アトム」と「ハウルの動く城」くらい。

谷原　そのふたつはなぜ曲先だったんですか？

谷川　「鉄腕アトム」は手塚治虫さんに「やらない？」と言われて、ぼくもアトムが好きだったから「やります」と答えたら、もう高井達雄さんの五線譜とカセットテープが送られてきちゃった（笑）。その頃曲先なんてあまりやってなかったから、結構適当にアトムの特徴を入れていって、字余りになったら「ラララ」で（笑）。しかもそれが受けてるみたい。みんなあそこで力が入るんですよね。

谷原　たしかに入ります。しかも、そこにアトムの雰囲気を感じるんですよね。

谷川　ぼくはあれで学びましたね。詩はびっしりと、隙がないように書いてしまうけれど、歌詞はやっぱり、どこか間がないとダメなんだな、と。

＊

谷原　谷川さんが詩を書き始められた頃は、詩が社会のなかで広く読まれているときでしたか。

谷川　まだでしたね。だって、なにしろ食わなきゃいけないから、大手の新聞なんかから依頼があって書くでしょう。そうすると現代詩のお偉方が、「大新聞に詩を書くとは何事か！」って怒った時代なんですよ。

谷原　詩とはメディアと対決すべきものだと？

谷川　マスメディアの通俗を嫌ったんですね、同人雑誌で切磋琢磨しながら、成長していくべきだ、ということでしょうね。

谷原　「抜けがけはやめろ」ということでしょうか。

谷川　だいたい、戦後はずっと左翼的な思想が主流だったから、新聞というとブルジョア新聞だって意識があったんでしょう。だから『赤旗』にだったら書いてよかったのかもね。でもその頃は『赤旗』からは注文が来なかった（笑）。いまは詩をちゃんと評価してくれていて、ぼくも書いてますけど。

谷原　じゃあ谷川さんご自身が、そうやって新聞など広い領域で書いていくことで、詩を世のなかに受け入れさせていく旗振り役のような存在だったんですかね。

谷川　結果的にそういう面もあるかもしれないけど、自分ではその意識はほとんどなかったです。ただやっぱり詩人っていうのは仕事がなくて、食うのも大変なひとが多かったから、できるだけ、たとえば絵本の仕事とかで複数の作者が必要なときには「やってみない？」と誘ってはいました。寺山修司をラジオに誘ったりもしましたね。

谷原　そうなんですか。

谷川　彼が「食えない」と言っているときに、ラジオの帯番組をもらってきて。ふたりで彼のアパートで一晩で書き飛ばして、そのあとポーカーなんかしたり。ぼくはわざと負けて賭け金やったりしたんだけれど（笑）、でもじっさい彼のほうが強いんですよね、あいつ賭け事けっこう強くて。

谷原　寺山さんって、どんなかたでしたか？

谷川　当時、黛敏郎とか三島由紀夫とか、若くして世に出ている才能あるひとがいたでしょ？　寺山は「あいつらぜんぶ殺したい」って言ってましたよ（笑）。才能がある連中は、自分が世に出ていく上で邪魔だったんだろうね。

谷原　でもその頃はもう、谷川さんもすごく世に出てらっしゃったわけですよね？

谷川　彼はすごく才能があったから、ラジオドラマであっと言う間にイタリア賞を獲ったんです。そのとき、「谷川さんに勝った！」ってニコニコしてましたね（笑）。それから、一緒に本屋さんに行くと、並んだ雑誌を見ながら「どれに自分が載ってて、どれにあいつが載ってる」と調べていましたね。

谷原　負けず嫌いだったんですかね。ぼくも強くはないですけれど、おもしろいと思った作品に、ぼくと似たタイプの俳優がぽんと出ているのを見ると、「いいなあ、ちくしょう！」と悔しくなることがあります。しかもそいつが下手だったりすると、もう腹が立って（笑）。だけど、けっきょく上手い下手じゃないんだな、と思ったりもします。上手でも「嫌だな」と思う芝居と、下手でも「いいな」と思う芝居があるんですよね。

谷川　詩の朗読でも、なにを言ってるんだかよくわからないけどすごくいい、というものがありますね。うまい役者さんがなめらかに読むと、ぜんぜん詩じゃなくなったりするときもある。

谷原　また同じひとであっても、そのときどきによって違ったりしますよね。芝居をやっていて、本番前のテストの段階で、そこにいる全員が「そうか、このシーンはこれがやりたかったんだ」とわかるものができる瞬間があります。でも霞みたいなもので、「これで摑んだ」と思って同じようになぞっても、そこにはもうないんです。

谷川　それは詩の朗読でもありますね。録音のときにスタジオでテストすると、二度目は発音を明瞭にしたいとか、どもらないようにしようとか、意識がそっちの方にいっちゃって、本番がだめになる。そんなことぜんぜんかまわずにやった方が、多少発音が不明瞭でもいいものがあるんですよね。

谷原　朗読は一種のライブでもありますが、お客さんとのあいだのコール＆レスポンスのようなものはありますか。

谷川　それがいちばん楽しみですね。声に出して目の前に聴衆がいる

谷川俊太郎　Shuntaro Tanikawa　31年生。52年の第一詩集『二十億光年の孤独』以降、最新詩集『あたしとあなた』まで、現代詩の第一線で活躍しながら、こどもから大人まで幅広く読まれ、愛される作品を作り続けている。翻訳、絵本、劇作、作詞などジャンルを超えて活躍。近年では詩を釣るiPhoneアプリ『谷川』や、郵便で詩を送る『ポエメール』など、詩の可能性を広げる活動も。

愉しい文学
Wonderful BUNGAKU

谷川俊太郎＋谷原章介
大澤真幸
円城塔
八代嘉美
迫川尚子
片山亜紀
斎藤美奈子
大江健三郎（抜粋）
岡真理（再録）
沼野充義（再録）
玉川重機

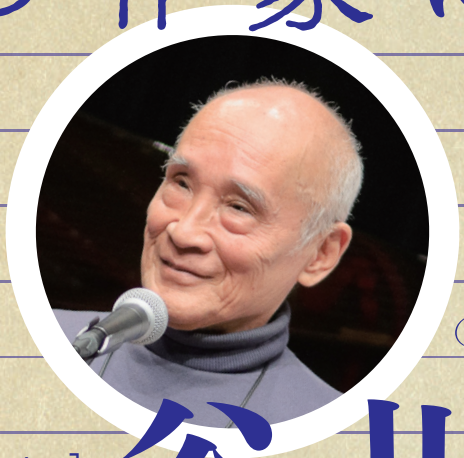
こども WB

インタビュー連載、スタート！

¥0

谷原章介の「あの作家に会いたい」

Shosuke Tanihara



Shuntaro Tanikawa

［ゲスト］谷川俊太郎

谷原　きょうはお目にかかれて光栄です。ぼくが谷川さんの作品に最初に触れたのは、小学校の授業、教科書のなかでした。それからアートへの興味が出てきた十代後半の頃、谷川さんと寺山修司さんのビデオ・レター（『寺山修司＆谷川俊太郎――ビデオ・レター』）を見て感激し、そこからあらためて谷川さんの詩の世界を見せていただいています。読んでいて、公平で正直で、と同時に強靭で、一文字一文字が、刻むように出てくるような感じを受けます。谷川さんは、詩人になられてもう六十年以上経つわけですよね。

谷川　ええ、何しろほかのことができないんです。大学も出てないし、夏の盛りにネクタイして混んだ電車になんて絶対乗れないから、お勤めは無理だしね。やってるうちに、自分には詩がいちばん向いていると思うようになりました。

谷原　はじめられた頃は、どういう意識だったんですか？

谷川　「とにかく生活費を稼がなきゃ」ということだけでしたね。最初から「どうやって金を稼ぐか」ということが最大のテーマで、良い詩を書こうとか良い詩人になろうって意識はなかったんです。基本的に、アーティストよりもアーティザン（職人、職工）という意識でやってきました。だいたい、「芸術家」というのがあまり好きじゃないんですね。エゴが強いひとが多いし。好きなアーティストが古今東西何人かいて、そのひとたちがいればもう十分。それ以外は、美術品にしても、民藝品のほうが好きだったりします。

谷原　生活に根ざした詩、というわけですね。

谷川　ただ、やっぱり現代詩だからいろいろ欲が出てきて、「いままで誰もやらなかったことをやりたい」とか、そうとう芸術になっちゃったものもあります。

谷原　これまでの作品でも、いろんなスタイルがありますものね。

谷川　オールラウンドでないと詩では食えないですからね。カットマンとかドライブだけじゃダメなんで、あの手この手で食ってきました。

谷原　いまも朗読をされたり、ほかのジャンルのかたとコラボレーションをしたり、いろんなアプローチで詩を発信されていますが、やっぱり原動力は「飯を食う」なんでしょうか？

谷川　そうですね、詩が売れないから（笑）。自分の詩だけじゃなくて、現代詩全体がなんとなく沈んでいってるから、どうにか活気付けたいというのがあって、いろんなことをやってます。

谷原　詩は、文字で書かれているのを読むのと、声に出して読むのとで、表情がすごく変わるように感じます。もちろん読み手によっても変わるでしょうし。なぜそこまで変わってしまうんでしょう。

谷川　詩は意味だけじゃないからだと思いますね。だいたい言語は意味